

ヨーロッパ諸国のハロウィン

ゴットフリート・コルフ (編)

河 野 眞 (訳)

[解題]

ここに訳出したのは、2001年にドイツ民俗学会の機関誌(同年後期号)に掲載された「ヨーロッパのハロウィン」に関するアンケートによる共同研究である¹。これを企画・推進したのは、テュービンゲン大学の民俗学科の教授ゴットフリート・コルフ(1942年生)であった。同大学の民俗学教室は、1960年代からヘルマン・バウジンガーの主宰の下にドイツ語圏における民俗学の改革の中心地となってきた。コルフはバウジンガーの十数年後輩で、特に現代フォークロアを直接手懸ける方向で持ち味を発揮してきた。若い時期には、巡礼慣習を現代社会の脈絡から見直す、まとまった仕事によって注目された。また10数年前には、パリのディズニーランドをめぐる、そこで起きた文化接触と文化摩擦を分析したことがある²。今回のハロウィンのテーマでも、そのときの視点の取り方や手法が雛型として活かされている。

ハロウィンは、今日では日本でも親しまれるようになってきているが、もちろんアメリカの行事として、である。その季節、これを取り入れた商店の飾り付けつけも目立つようになった。コンビニでも百元ショップでも、ディズニー・キャラクターによるハロウィンを組み紙にあしらった菓子類や紙コップも並んでいる。それだけにまた、簡単な解説なら至るところで目にすることができる。元はアイルランドの祭りであったことも、新聞のコラムやいわゆるフリー百科辞典“Wikipedia”などでも触れられている。それどころか、同じくWeb-site上では、特にその季節にはアメリカ各地から発信される情報は、料理のレシピな

¹ „Halloween in Europa“ In: Zeitschrift für Volkskunde, 97/II (2001), S.177-290.

² Gottfried Korff, *Disney-Diskurse. Bemerkungen zum Problem transkultureller Kontakt- und Kontrasterfahrungen*. In: Zeitschrift für Schweizerische Volkskunde, (1994).

ども含めると膨大なものになる。

しかしこうした世界的な現象も、少し遡ると、いたって限定的であった。ヨーロッパ諸国でも、幾らか試行的な動きはあったものの一般には行なわれていず、専らアメリカ文化の代表的な事例としての話題にとどまっていたようである。ヨーロッパでの実例は最近のことで、アンケートでも何人か言及しているように、1997年秋にフランス・テレコム社が携帯電話の新機種の発売に向けてハロウィンを活用した派手な宣伝で話題を集めたのが、直接的な起点の一つになった。エッフェル塔を擁するパリのトロカデル広場に8500個のカボチャが並べられたのは前例のない思い切った演出であった。そうしたアメリカ文化の色彩が強い行事がヨーロッパ諸国でどんな反応を受け、またどのように推移するかがここでは課題となっている。その意味では現代フォークロアの実例で、またコルフ教授は研究のまとめ役に相応しい人でもある。

なお言い添えれば、ドイツ民俗学会が各国へ呼びかけて報告をもとめるという手法には前例がある。これより約30年前にヘルマン・バウジンガーがフォークロリズムに関して行なったのがそれであり、民俗事象の現代社会での実態に迫ることを促すこの概念が国際化的にする上で大きな意味を持った³。今回の企画もその遙かな延長線上にあると言えるが、またフォークロリズムは狭義では民俗学知識の民間への流入に要点があるとするなら、ハロウィンは必ずしもそれでは解き切れない現象であるとコルフが始めに述べているのは、概念理解の面から興味深い。

なおアンケートへの回答のすべてが同じ立脚点で統一されているわけではないが、基本になるコルフ論文の特徴について簡単に触れておきたい。それは、先行研究との関わりを見るとよく分かる。もっとも、先行研究と言っても、ハロウィン研究という狭い意味ではなく、宗教的な色彩を漂わせている現代のイベントを扱う視点のあり方であるが、図式化の弊は承知の上で、理解の便を優先させる。ここでは、日本でもよく知られているクロード・レヴィ＝ストロース (Claude Lévi-Strauss, born 1908)、ヴィクター・ターナー (Victor Witter Turner, born 1920)、ジェイムズ・クリフォード (James Clifford, born 1945) も取り上げられている。このうち、レヴィ＝ストロースは、時代が1950年代以来と早いこともあって、いかにも文化人類学という性格を見せている。言うなれば、現行の諸事象の奥に原理的なものを突きとめようとする姿勢である。原理的なものとは、人間の思考や行動におけるプリミティブな、あるいは神話的な脈絡と言ってもよく、サンタクロースをめぐるフランスの騒動へのレヴィ＝ストロースの切り込み方のすぐ隣には非欧米地域の野生

³ Hermann Bausinger, *Folklorismus in Europa*. In: *Zeitschrift für Volkskunde*, 1969. なおこれには次の拙訳がある。参照、愛知大学国際問題研究所『紀要』91号 (1990)。

と見える人々の観察から得られた法則が控えているようなところがある。それに較べると、ターナーでは、現代の様相を読み解くにあたってアフリカの部族社会の観察から得られる脈絡が引き合いに出されたりはするものの、それを〈劇場性〉のような概念に置き換えるなどいわばオクターヴを変えようとするような志向がみとめられる。さらにクリフォードになると、〈ルーツよりルート〉の標語もその表れであろうが、諸事象を根源に照らして評価する姿勢を意識的に払拭しようとしている。やや単純化して羅列した三人の持ち味は、またコルフ教授が那邊に親近であるかの指標でもある。本編の意義も、現代フォークロア研究を推進するにあたって、大法則を言い立てるよりも、多彩で多面的な現実を、それに照応する種々の視点を丹念に突き合わせているところにある。10種類のキーワードを疑問符を付して挙げているのは、強引な立論を性分としない人であることを窺わせるが、踏まえるべき要素が押さえられている点で刺激的でもある。またそれは、定かな方向に行き切らない中途半端な力や要素の複合である生活文化に取り組むに際して、今日、諸学に共通となりつつある姿勢と重なってもいるであろう。

全体の構成は次の通りで、見渡しの便宜のために各報告の対象となっている国名を補足する。執筆者は15人、14篇で、対象国は10か国である。

(アンケートのためのキーワードの提示) Gottfried Korff, *Halloween in Europa. Stichworte zu einer Umfrage.*

(アイルランド) Patricia Lysaght, *Hallowe'en in Ireland: Continuity and Change.*

(フランス) Martine Segalen, *Halloween à la Française.*

(フランス) Nicoletta Diasio, *Communion, confusion, consommation: de la gourmandise et des morts.*

(イタリア) Fabio Mugnaini, *Hallowitaly.*

(スペイン) Josefina Roma, *Halloween – wiedergefunden.*

(ノルウェー) Ane Ohrvik, *Halloween in Norway.*

(スウェーデン) Agneta Lilya, *Halloween in Schweden.*

(オランダ) John Helsloot, *Halloween in Holland.*

(オーストリア) Bernhard Tschofen, *Halloween in Österreich.*

(スイス) Gabriela Muri / Ueli Gyr, *Halloween – Halloweener – Hallowinner? - Halloween zwischen Brauchverwaltung und Eventkultur in der Schweiz.*

(ドイツ) Heinz Schilling, *Komet Halloween.*

(ドイツ) Alois Döring, *Halloween im Rheinland. Notizen zu einem Forschungsprojekt.*

(ドイツ) Sabine Doering-Manteuffel, *Zeichen vom Fliegengott.*

なお訳出にあたっては、旧知でもあるコルフ教授の好意的な配慮を得た。

ヨーロッパのハロウィン — アンケートのためのキーワード

ゴットフリート・コルフ, テュービンゲン/ドイツ

(原タイトル) : Gottfried Korff (Tübingen), *Halloween in Europa. Stichworte zu einer Umfrage.*

1. 新しく, そして複合的?
2. 消費人類学?
3. メディアの行事?
4. カボチャ・カルト?
5. <ルーツ> (roots) か <ルート> (routes) か?
6. <仮面をつけた文化>?
7. 世俗化と脱神話化?
8. 教会への対立者?
9. 代替宗教としての機能?
10. 読解の多様性?

1. 新しく, そして複合的?

ハロウィンがヨーロッパの新しい複合的な現象であることは、誰も否定できまい。新しい¹と言うのは、民俗研究者や歴史家や文化人類学者の説くところでは、ハロウィンはその故土とされるアイルランドあるいはイングランドにおいてすら、1990年代に再移入したときには、19世紀に大西洋を越えて行ったものとは違った形態と機能をもっていたからである。カボチャのマスクやモダンな空騒ぎや愉快なお化け儀式や <悪さともてなし> (“trick and treat”) のハロウィンは、アメリカ東海岸へアイルランド人たちが移民として渡っていったときに持ち伝えたものとは、もはや同じ行事ではない。エスノロジーの研究文献¹に従うな

¹ これについては次を参照, Jack Santino, *Halloween in America. Contemporary Customs and Performances*. In: *Western Jolklore*, 52 (1983), p.1-20.; Ders., *The Hallowed Eve: Dimensions of Culture in a Calendar Festival in Northern Ireland*. Lexington 1998.; John Moore, *Halloween in den Vereinigten Staaten*. In: Marina Scheinost (Hrsg.), *Haube, Hausfrau, Halloween in den Kulturwissenschaft, Festschrift für Elisabeth Roth zum 75. Geburtstag*. Hildburghausen 1996, S.85-91.

ら、それはアメリカにおいて、当初はためらい勝ちに変化を続け、最後はこの上なくダイナミックなパフォーマンスにまで発展した。そして他ならぬその最後の行程こそ、別物の形態と機能によって、大西洋を逆に渡ることになった前提であった。帰還が起きたのは20世紀の90年代のことで、国によって熱意に部分的な差異があるものの、西欧・中欧のすべての国々に入り込んだ。例えば、フランスはドイツよりも〈ハロウィン化〉の動きが強く、ベネルクス三国はスカンジナビア諸国よりもハロウィンを喜ぶ風潮を見せる。またロマンス語諸国は、北西ヨーロッパの諸国に較べると、幾分及び腰でもある。次に、複合的であることを取り上げると、この行事がはじめ西方へ伝わり、アメリカ東海岸の文化のなかに（後にはアメリカ全土のメディア文化に）定着し、さらに後に東のヨーロッパへ伝播して、ヨーロッパの意味とパフォーマンスの仕組みに影響するようになった一連の変質がある以上、複合的な現象と言わねばならない。ハロウィン行事に向けたアメリカ合衆国の動き²を追跡するなら、多数の時代様式³と環境特徴によって規定された定着の歴史、すなわち時間・空間両面で多様なシンボルの重なりと機能の推移から出発しなければなるまい。ハロウィンについては、新聞や近年のインターネットでも、元はアングロサクソン諸国における万霊あるいは死者への信奉行事であったとの説明が付けられてはいるものの、実際には、アメリカでの約120年にわたる歴史のなかで別のものになってしまった。ハロウィンは、大西洋の向こうでシンボルと儀式的価値を高めていった。それは特にこの数十年間に顕著でもあったが、それによって、大きな文化的変動のなかにあるヨーロッパ（西欧と中欧に限るべきだろうか）にとって、魅力あるものとなったのである。ハロウィンの突然の帰還（と言えるかどうかだが）と、この複合的なイベントが見出した（さらに今後も見出すだろう）即座の受容とは、この行事の内包するものとその意味の局面に当然にも影響した。因みに、本誌では1969年にフォークロリズムに関するアンケート調査が行なわれたが、以来、30年以上を経過した2001年に実施したこのハロウィン調査も、やはりフォークロリズムの対象であるが、刺激的であることにおいて往時に対しても遜色がないであろう⁴。

² Karen Sue Hybertsen, *Twisting Space: Women, Sprits, and Halloween*. In: Leseley A. Northup (Ed.), *Women and Religious Ritual*. Washington D. C. 1993, p.37-50.

³ 20世紀初めには、この行事の終焉が予測されたほどであった。これについては、次の研究を参照、James Dowman, *A Vanishing Folkfestival. Some Halloween Traditions and Reminiscences*. In: *Twentieth Century*. London 1901, p.277-291.

⁴ Hermann Bausinger, *Folklorismus in Europa. Eine Umfrage*. In: *Zeitschrift für Volkskunde*, 65 (1969), S.9-55.

2. 消費人類学？

アメリカのハロウィンが、いつ、どこで、どのように、何のためにヨーロッパへ（ふたたび）入ってきたのか、正確には誰も知らない。いずれにせよ、ハロウィンは、（少なくともフランスでは）1997年から1998年にかけての短い期間に広がりを見せて、ハロウィン・スペクタクルの最初の頂点をつくりあげた。それを窺う資料としては、一つには、アメリカの新聞諸紙のコラムがあり、二つには、ヨーロッパ諸国の大新聞の文化面に掲載された分析記事が挙げられよう。『ニューヨーク・タイムズ』紙は、1997年10月31日付けの紙面において、“Ah-lo-eeen”を“American Holiday in Paris”として取り上げ、“French Halloween”を解釈して〈ここフランスでは、ファースト・フード・レストランやアメリカ映画やソフトボール・トーナメントが…… 国民生活に占める割合が強まる一方だが、発展しつつあるアメリカ文化のまた新たなシグナルが出現した〉と解説した。また『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトUNG』紙は、1999年10月28日付けで「頭のなかにカボチャ？ 日常文化のグローバリゼーション、フランスでハロウィンの盛大な祭り」の見出しを掲げて、1996-97年以来見られるようになったハロウィンの大波について詳しい記事を載せた。『フランクフルター』紙は、またアメリカの行事がフランスで突然輝かしい経歴を加えた第一の要因として、経済的な条件を挙げた。その一番目は、フランス最大のコスチューム・玩具メーカーであるマスボール社(Masport)の積極的な戦略で、同社は、ライヴァルのセザール社(César)に対抗して1990年代になってアメリカ市場との関係を作り上げてきた。二番目の要因は、フランス小売業界の大きな利害が関係していると言う。ちょうど学年始め(la rentrée)であり、また夏のヴァカンスとクリスマス商戦のあいだで、秋は消費が低迷するところから、マーケットと心理の刷新を狙ったと言う。とりわけ、規模の大きなデパートやスーパーマーケット⁵は、ハロウィンを、新たな商戦とマーケット戦略を練り上げる上での試行のチャンスとして、さまざまに活用した、とも述べている。遠く大西洋の彼方に目を向けても、やはり経済的なファクターが大きな意味をもってきたことが窺える。『ニューヨーク・タイムズ』の1997年の紙面では、ギャラリー・ラファイエット(Galleries Lafayette)のスポークスマンの次の発言が引用された。〈我々にとって、

⁵ スーパーマーケットが目的意識をもった文化仲介者となっていることについて、“FAZ”(vom 14. Februar 2001, S.18.)は、アメリカのスーパーマーケット・チェーン“Safeway”によるUSAでのドル・コインの導入(“Golden Dollar”)を取り上げた。また、この種の動向については、これより早く1989年にW. リップが、祭りや文化の様式形成におけるデパートやスーパーマーケットの美学が果たす役割の重要性を指摘していた。参照、Wolfgang Lipp, *Feste heute. Animation, Partizipation und Happening*. In: Walter Haug u.a. (Hrsg.), *Das Fest*. München 1989. (= Poetik und Hermeneutik, 14), S.663-683.

ハロウィンは、正真正銘のディスカヴァリーであり、素晴らしいマーケット・チャンスです。……ハロウィンがこれほど成功しているのは、楽しいひとときを過ごすための口実を皆がもとめていることにあると言ってよいでしょう。⁶新しい行事の設定や普及においては、特にそれが小道具の取り入れ（衣装、おふぎの品々、果物の種類）で消費者とつながっている場合には、そうした経済的要因を過小評価すべきではないだろう。しかしまた、ヨーロッパでのハロウィンがこの数年に収めたサクセス・ストーリーは、偏に広告・マーケティング戦略に還元するのでは短絡に過ぎるのではないかと問うことも必要であろう。他面では、エスノロジーや文化研究は、近年、消費を生産的な文化類型として読み解くことを習得し、その観点から新たな研究への志向を伸展させた。消費の実態と消費の対象とは、社会的・時代的・地域的な自己像を構成する要素として機能している。〈消費におけるあらゆる行動は文化生産の行動であるが、それは消費が常に意味の生産だからである。⁷〉ハロウィンにおいて、マーケットと消費と民衆文化はどのような関係にあるのだろうか。ハロウィンは、コマーシャルの行事なのだろうか。ハロウィンは“consuming anthropology”にとって観察対象となるのであろうか。

3. メディアの行事？

同様の問いは、メディアに関しても立てられよう。新聞、テレビ、映画が、ヨーロッパでのハロウィンの広がりにも多大の関心を寄せてきたことは疑えない。それは、ドイツ・テレビの番組“Big Brother”が2000年10月末に取り上げたカボチャのパレード、あるいはフランスの各紙に載ったテレコム・フランスによる15,000個のカボチャのようなスペクタクルに富んだ報道や放映だけではない。各地の地方紙が伝える写真付きの記事や解説も膨大な数に昇っており、それらもまた、ヨーロッパに普遍的に (ubiquitär) みとめられるハロウィンの爆発的な高まりを理解することを試みている。そうしたジャーナリズムの解釈は、気持の苛立ちや当惑を突き抜けるところまでは行ってはいないが、それだけに、読者に緊張と神秘的な雰囲気をもたらすことになり、記事の魅力を高めてもいる。地方的ないしはローカルなメディアがこの現象を取り上げ、その際、民俗研究者や地方誌家の理解で裏付けられるとしても、ハロウィンは決して、フォークロリズムについてかつて疑問が突きつけられたような、〈応用〉民俗学あるいは学問の逆流現象の所産ではない⁸。むしろ、

⁶ New York Times vom 31. Oktober 1997.

⁷ John Fiske, *Understanding Popular Culture*. Boston 1989, p.35.; また次の文献も参照, Orvar Löfgren, *Consuming Interests*. In: *Culture and History*, 1990, p.7-36.

⁸ Hermann Bausinger, *Folklorismus in Europa* (注4)

〈現実という社会的構造体〉の産物であり、そこには〈沈黙の知識〉(tacit knowledge)こそほとんど入っていないものの、送り伝えられてきた、エスノロジーの観点からまとめられた伝承知識の幾らか、近年の読解エリートたちによる(特にパフォーマンスの形態での)図像・シンボル理解のあるもの、それにメディア産業(Medienindustrie)の断片的なイメージネーションの数々が流れこんでいる。その際、メディア文化の影響は、きわめて分散的になることがある。2000年のハロウィンでは、出たばかりの『ハリー・ポッター』の図像・思考の世界が推進力として表面化した。『ハリー・ポッターと魔法の竈』は、少なくともドイツに関して言えば、その年の10月と11月にマーケットでは豪勢なPR行動が展開された⁹。フランスでは、既にその前年に、ハロウィンの看板ともなっている魔法のテーマが、テレビの人気番組のシリーズ「奥様は魔女」と、その風俗雑誌への反映によって広がりを見せていた。その際、イコノグラフィーの分野で魔法に付き物とされているとんがり頭巾(chapeau pointu / peak hat)に中心的な意味が置かれた。とんがり頭巾は、魔法の表出における国民的な審美性を帯びたモジュールとなったのである。かくして、例えば、代表的な女性誌『コスモポリタン』は1999年11月にこう表現したものである。〈魔法がファッションとなっている。ハロウィンの成功で、とんがり帽子と中世の箒が普段の品物になってしまった。¹⁰〉。この種類のイコノグラフィ的な〈ドッキング〉は、他所でも観察されたであろうか。どのようにしてメディアはこの〈新しい〉対象を納得させたのであろうか。

4. カボチャ・カルト?

“chapeau pointu”, すなわち尖がり帽子は、フランスの昔話における典型的な魔法の装いであるが、それがディズニーの魔法が元になったアメリカのハロウィンの魔法とくっ付いたのである。そして、これと同じフランス・アメリカ合作が、フランスの新聞紙上ではカボチャの削り貫きにおいても起こった。ヨーロッパでは、カボチャは、子供の行事としては大きな灯をともした怖い顔の形だったが、次第にグルメたちが求めるアイテムに変わってきたように思われる。カボチャは、「マーケティング・ドイツ」(Marketing-Deutsch)では〈イヴェント・フード〉の名称で名指されるものとなっている¹¹。実際、ハロウィンは、カボチャを用いた新しい料理のレシピやメニュー、さらにテーブル・サー

⁹ “Tagesspiegel” 誌の特別誌面には次の見出しが載った。「火鍋を囲む舞踏、ベルリンは魔法使いの弟子さながら：4人目のハリー・ポッターが土曜の逢魔ヶ時にやって来る」参照，“Der Tagesspiegel” vom 8. Oktober 2000.; またその一週間後の特別誌面「土曜の映像」のタイトルは「ドイツにおけるポッターの夜」(“Potter-Nacht in Deutschland”), 参照, „Bild am Sonntag“ vom 15. Oktober 2000.

¹⁰ Cosmopolitan, Cahier Special Nr.312, November 1999.

¹¹ Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 30. April 2001.

ヴィスの案内書の出版されるチャンスにもなっている。ハロウィンと結びついたカボチャ・カルトの奥に、農業関係の利害を推測するといったこともなされてきた。1998年10月30日付けの『ル・モンド』紙には「農業生産者の新たな販路」の見出しの下に次の記事が載った。カボチャの〈フランスの生産量は、1990年の14600トンから1997年には23900トンに伸び、ポルトガルと首位を争っている〉と言うのである。また1998年には、『ル・モンド』紙が、ハロウィンは、カボチャが〈長く蔑まれた〉後に〈復権 (rehabilitaiton)〉と〈復位 (revolarisation)〉を果たしたとして賞賛した。もともと、その際、野菜としてのカボチャについては〈この10年、料理の食材としては、手がかかり過ぎるために悪評も甘受している。それに田舎のシンボルともなった〉とされる¹²。しかしまた同じ箇所ではまた、〈カボチャ信仰〉や〈聖カボチャ〉という言い方も入っている¹³。さらに『女性』(“Femme”)誌は、1999年秋に「ハロウィンのカボチャとシンデレラのカボチャ」の見出しの下に、魅力的な一連のレシピを掲載した。カボチャについては、〈スープだけでなく、ハロウィンの料理一式を整えることができる〉と言うのである。それだけではない。カボチャは、〈北米ケルトのソース〉のベースになる食材と解されたのだった。それどころか、〈この大規模な祭りは、アメリカ人とヨーロッパ人が古い従兄弟(従姉妹)であることを、私たちに思いおこさせる〉、とも言う。また1998年10月30日付けの『ル・モンド』紙は、〈カボチャ礼賛〉の見出しの下に、カボチャを植物学の観察の対象とすることに教育効果があるとして注目を促した。曰く、〈学校では、多くの教師が、このイベントを結局のところ教育的なもののみなしている。カボチャは、生物学の基礎学習のきっかけでもある。つまり、春に播いた種が少しずつ成長するに従い、手仕事にたずさわることを可能にする。また小学校で英語教育を始めるにあたり、《ジャック・ランタン》の説話は明らかに刺激的である。〉ハロウィンの急激なひろまりはメディアから謎とも見られ、また説明の必要に迫られてもいたが、「カボチャ礼賛」は、合理的な目的に沿ったものにしてみ見せたのである。こうした説明の付け方には、当然にも、ヴァリエーションがあるであろうが、その形態はどうであろうか。

5. <ルーツ> (roots) か <ルート> (routes) か？

メディアとハロウィンの複雑な関係を視野に置くなら、ホラー系スリラーやホラー映画も見逃すわけにはゆかない。これらが20年程前からヨーロッパの映画館やテレビ番組で非常な人気を博し、ハロウィン向けの特別企画も少なからず放映されていることは、2000

¹² Le Monde vom 30. Oktober 1998, p.23.

¹³ 同上, p.1.

年のドイツの多くのテレビ局のチャンネルを検討するだけでも知られよう。ハロウィンをスリリングなスパーク・ストーリーとして再生させたのは、これら主にアメリカのプロダクションに胚胎する映画類であったが、そうした映画自体は、90年代の行事の波が高まる前にも既にヨーロッパの映画市場に入って、知識の面でも刺激の面でも影響を及ぼしていた。さらにそれらすべてに先立つ作品として、ジョン・カーペンター (John Carpenter) の1978年の『ハロウィン』(ドイツでは「恐怖の夜」のタイトルで封切られた)を挙げることができよう。因みに、この映画は成功を取めて、1995年までに6編の後編・続編が製作され、さらに1998年には〈20年後のヴァージョン〉が『ハロウィン H20』のタイトルで捧げられた。劇場映画やテレビ・ドラマ、とりわけカリフォルニアの撮影所で製作された作品類は、文化的類型ならびに様式のグローバリゼーションと国際化における古典的メディアとされている。メトロポリタン・カルチャーの図式化された体験も、影響力を強める一方である。これらが爆発的な広がりを見せる土台としては、西側世界において、資本と移住と情報の流れが作るダイナミズムが高まっていることが挙げられよう。またその爆発的な拡大が、各種の都会的なイベント・カルチャーに儀式的形をあたえている¹⁴。これにはまた、新しい消費欲求の型式化や、新たな労働・関係・コミュニケーション様式の生成も属している。文化的な相互依存・識知のシステムとしてのグローバルな文化も、なローカルな具体的な状況のなかではじめて現実のものとなる。すなわち、ローカルあるいは一定地域の類型として現れるのであり、それぞれの文化状況の伝統と結合したものとなる。つまり“*rentrée*” (再開, 帰国)である一定地域のカボチャ文化と、ローカルな位相で伝えられてきた灯の行事と結合することは、例えばスイスの〈カボチャ提灯の行列〉¹⁵によっても知られよう。かかるコンビネーションと紛糾は明らかになっているであろうか。グローバルな文化と雖も、実際には〈結わえられ〉、〈着床させられる〉。つまりジェイムズ・クリフォードが整理して言ったように“bounded and embedded”なのである¹⁶。かかる結わえられ着床させられる姿の実際はどのようなであろうか。

〈文化のグローバル化は、平準化と分岐と特化とが同時に進行する複雑な過程であり、

¹⁴ これについてはレギーナ・ベンディックスとギーゼラ・ヴェルツの編集による次の特集号を参照, Regina Bendix und Gisela Welz (Hrsg.), (Sonderheft) „*Cultural Brokerage. Forms of Intellectual Practice in Society*“ des Journal of Folklore Research 26 / 1999, Nos. 2/3. ここには次の項目が取り上げられている, “Christopher-Street-Day”, “Love-Parade”, “public folklore”.

¹⁵ 参照, Ueli Gyr, *Räbeliechtli-Umzüge in der Stadt Zürich. Zur Merkmalstypik eines modernen Kinderbrauchtums zwischen Vereins- und Quartierveranstaltung*. In: Schweizerisches Archiv für Volkskunde, 78 (1982), S.36-52.

¹⁶ James Clifford, *Tavelling Cultures*. In: Laurence Grassberg u.a. (Hrsg.), *Cultural Studies*. New York 1992, p.28.

そのなかでは、商品と情報とシンボルが、まったく異なった意味を帯びる。部分体は、それが文化の枠として組み込まれている特殊な連関から遊離して、世界的に広がり、その過程のなかで動き回って、新たな、また時に反復性をも帯びる意味づけに定まってゆく。¹⁷ 1990年代後半におけるヨーロッパでのハロウィンの急速な成功の背景となった意味付け、定義、さらにモチーフをめぐる状況は、現代社会の諸々のトレンドや傾向によって規定されているのであり、決して古いヨーロッパ（アイルランド北部）の死者への追憶行事が主導的なのではない。もっとも、民俗学・文化研究の側からの説明や、さらにインターネット上の情報では、相変わらず、神秘的・発生論的な位置付けが盛んになされている。しかし、ハロウィンをめぐることは、ジェイムズ・クリフォードが促すところに留意するのが、間違いがなかろう。すなわち、現代社会のなかでの儀式やシンボルの意味付けについては、主にルーツ (roots, 根) の面から見るのではなく、ルート (routes, 経路)、つまり文化が拡散する過程での経過点や区間の面から観察するべきであろう¹⁸。問いは、何よりも、〈ルート〉に向けて、目下の〈結びつき〉に向けて、〈定着のあり方〉に向けて発せられなければならない。

6. 〈仮面をつけた文化〉？

ハロウィンの拡散に際しての特に重要な経過区間、とりわけヨーロッパへの輸出を準備した〈フォーマット〉を挙げるなら、アメリカ東海岸の都会性に富んだ環境のなかで形成された〈前青春期〉¹⁹の行事と中産階層の特権的行事とが結合したことが挙げられよう。〈グリニッチ・ヴィレッジのハロウィン・パレード〉²⁰を具体例にして、ジャック・クーゲルマスは、ハロウィンが1970年代半ばから“established adult celebration”になっ

¹⁷ Rüdiger Korff, *Global integration und locale Fragmentierung. Das Konfliktpotential von Globalisierungsprozessen*. In: Lars Clausen (Hrsg.), *Gesellschaft im Umbruch. Verhandlungen des 27. Kongresses der Deutschen Gesellschaft für Soziologie in Halle an der Saale 1995*. Frankfurt a.M. / New York 1996, S.309–323, s.S.316.

¹⁸ James Clifford, *Routes. Travel and Translation in the Late Twentieth Century*. Cambridge Mass. / London 1997.

¹⁹ 〈前青春期〉(Präadoleszent)は、ハロウィンを読み解く上で中心的なカテゴリーであるが、これについては次の研究がある。参照、Victor Turner In: *Das Ritual. Struktur und Anti-Struktur*. Frankfurt a.M. / New York 1989, p.164f. ターナーは、ハロウィンを、仮面によって際立たせられた〈年齢逆転の儀式〉と解釈している。また〈前青春期〉の児童については、〈仮面をつけることが、彼らに、野生的・犯罪的・自生的・超自然的な力をあたえる〉(S.165)とされる。

²⁰ Jack Kugelmass, *Wishes Come True. Designing the Greenwich Village Halloween Parade*. In: *Journal of American Folklore*, 104 / 1991, S.443–465.

たことを描き出した。学校とその周辺で1950年代以来行なわれていた行事に、パレードが接続し、学校・学校関連の行事をスペクタクルとなっていた。学校行事と新たな意味付けのエリート層のライフスタイル行事を架け渡したのは〈仮面をつけた文化〉であるが、これまた、印象深い写真をふんだんに盛り込んだジャック・クーゲルマスの著作のタイトルである²¹。クーゲルマスによれば、そのコスチューム・パレードの光輝と暗示に富んだ表現力の源は、ロー・マンハッタンに根付いていた〈数々のニューヨーク・デザインならびにアート・コミュニティ〉のナンバーの一つであった。因みにそうした参画は、〈ジェントルマン志向〉に他ならないが、これが行事・儀式を作る力を帯びることについては、ギーゼラ・ヴェルツが描き出したことがある²²。クーゲルマスはまた、都会的なハロウィンのダイナミズムを民俗行事のポスト・モダン的な展開と解し、その要点として〈溢れるばかりのインディヴィデュアル・アイデンティティ〉、〈家族の炸裂〉、〈ジェントルマン化によるコミュニティの歪み〉を挙げた。ハロウィンは〈発明された伝統〉であり、^{メトロポリス}大都会の経済的・社会的動向へのリアクションの形態であると言うのである。こうして生み出された儀式は、遊戯と想像力と改変の品々に依拠しつつ、大都会なかの発祥の現場（前青春期の学校行事）を超えてゆくほどの展開力を発揮した。事実、ヨーロッパでも、ポスト・モダンのライフスタイル文化を養う場所としての百貨店（例えばパリの「ラファイエット Lafayette」やベルリンの「カーデーヴェー KaDeWe」、また特にそのグルメ・コーナーやパーティー用品コーナー²³）は、ハロウィンが拡大する上での橋頭堡であった。他のヨーロッパ諸国でもそうだったのであろうか。それとも、ハロウィンは他所では、ただちに〈どこでも〉だったのか。また、ハロウィンは、都会的な人口密集を伴わない地方にも広がっているのであろうか。この現象は、大都会的な文化スタイルから遠く離れたところでも受容されているのであろうか。

7. 世俗化と脱神話化？

ジャック・クーゲルマスは、その意味付けのなかでヴィクター・ターナーの概念とモデ

²¹ Jack Kugelmass, *Masked Culture: The Greenwich Village Halloween Parade*. New York 1994.

²² Gisela Welz, *Inszenierungen kultureller Vielfalt*. Frankfurt a.M. u.a. 1996, insbes. S.345-360.

²³ 〈カー・デー・ヴェー・ハロウィン〉に関する次の雑誌記事を参照、(Bericht über das KaDeWe-Halloween im Jahr 2000) "Der Tagesspiegel" vom 30. Oktober 2000. 〈新たなパーティー・アニメル：ハロウィンの去勢羊：客たちは、吸血鬼の歯あるいは蜘蛛の巣を見せびらかした。カーデーヴェーのグルメ・フロアの陽気な化け物ダンスは、たちまち呪術的な状況となった〉。因みに、その催し物は2000年が3年目であったが、カーデーヴェー・デパートの営業主任によれば、8月にはすでに売り切れていた。それは、225マルクの入場券を購入した客が2700人に上ったことを意味していた。

ルに倣った。ターナーは、ハロウィンを〈境界をかすめる儀式〉(“liminoides” Ritual, すなわち “metaphorical and ludic”) と描き出し、「儀式から劇場へ」のタイトル²⁴の下に理論的なスケッチをおこなうに当たって、そうした推移の証明材料にしたのだった。現今のハロウィンに特徴的なのは、第一には明白な世俗化の趨勢であり、第二には同じく明白な遊戯化の趨勢である(その際、遊戯化 Ludifizierung とは、境界にぶつかること das Liminale から境界をかすめること das Liminoide への変化を指す)。デコレーションの要素やコスチュームの要素も重要な役割を果たすが、〈怖気をふるわせる〉目的だけではなく、おふぎけ・イヴェント・カルチャー (fun- and event-culture) を旗印とした体験効果をも目的にしている。むしろ近年のハロウィンのプレイ的な催しにおいて前面に立っているのは、〈ボディー崇拜 (body-worship)〉、〈ジェンダー仮面舞踏会 (gender-masquerade)²⁵〉といった儀式性である。扮装は、もはや伝承に従うのではなく、また近年とみに型にはまったものとなってきたデパートのお仕着せ商品(魔女、骸骨、怪獣)を受け入れるだけのものでもない。むしろ自己スタイリング (selfstyling) の領域に果敢に入ってきている。すなわちファッションに手仕事で変化をつけており、その点で時代批判・社会批判の領域でもある。〈参加者の大半が身につけているコスチュームは、本来ハロウィンと一体であった精霊や妖怪とはほんの僅かなつながりしか持っていない〉²⁶、とジャック・クーゲルマスは書き、グリニッチ・ヴィレッジのスペクタクルを反教會的な (profane) 催しであると指摘している。それは、世俗の宴と言ってもよい。すなわち、世俗化と脱神話化の産物と見てよいと言うのである。ところで、かかる考察は、ヨーロッパにも当てはまるだろうか。世俗化と脱神話化というカテゴリーは、ハロウィンを言い当てるのに適切であろうか。

クーゲルマス自身は迷っているようである。たしかに彼は、かのリチャード・ドーソンの有名な定義を思い起こしてはいる。それによれば、民間俗信 (popular belief) 形態でのヨーロッパからアメリカへの伝播は、決まって、世俗化と脱神話化の動きを伴っていたとされる。〈古い世界のデーモンは、大西洋を渡るのにひどく躊躇したことが判明する〉というわけである²⁷。しかしまたクーゲルマスは、宗教的に〈機能的な重なり〉があるとする面からも事態を見ていることが少なくない。クーゲルマスの用いる幾つかの概念も、

²⁴ Victor Turner, *Vom Ritual zum Theater: Der Ernst des menschlichen Spiels*. Frankfurt a.M. / New York 1989.

²⁵ これについては次の文献を参照, Kathryn Allen Rabuzzi, *Bodyworship: The Gender Masquerade of Fashion, Beauty and Style*. In: Lesley A. Northup (Hrsg.), *Woman and Religion Ritual* (注2.), p.127-140.

²⁶ Jack Kugelmass, *Masked Culture* (注20), p.21.

²⁷ Richard Dorson, *Historical Theory for American Folklore*. In: Ders, (Hrsg.), *Handbook of American Folklore*. Bloomington 1983, S.326-337, s.S.328.

それを示している。彼は、ハロウィンで演じられる〈シャーリー・テンプルからサダム・フセインに至る登場者についてポピュラー・カルチャーの《聖者》や《悪魔》といった〉言い方をして、それらを〈地上に引きずり降ろしたり、崇拝したり、親しい存在にしたり、化けの皮を剥いだりする²⁸〉。ハロウィンが大人の世界に戻った(すなわち“adult celebration”となった)ことによって、代替宗教的な雰囲気が高まった。それは、トーマス・ルックマンが〈ささやかな超越〉(kleine Transzendenz)のカテゴリーを抛りどころに構築した図式²⁹にも当てはまることになる。それによれば、ハロウィンは、もはや〈大きな(本格的な)〉超越、すなわち此岸と彼岸を儀式的ないしはシンボリックに架け渡す場所ではなく、この世界のなかでの超越、すなわち日常を乗り越え、日常を踏み越える場所、〈仮面を用いた〉避難や飛び領土作りや変身の場所である。シンボリックに変形を受けた儀式の反射のなかで、日常の圧迫は、自由と遊戯性と藝術の親しみある光の洗礼を受ける。ハロウィンが提示する〈ボディー崇拝〉と〈ジェンダー仮面舞踏〉のなかで、その自らスケッチをした世界の可能性のファンタジーへの憧れが細かく現実物となる。ハロウィンが〈大人の儀式(adults rituals)〉の方向へ展開を見せるようになって以来、解説(演じるものの自己解説も少なくない)のなかで、擬似宗教的な対比・超越の性格が多く認められる傾向にある。合理性が徹底され、脱情緒が進む社会(すなわち〈世俗化された社会〉³⁰)はハロウィンのなかに、自己のliminoidな、また遊戯的な対極を見出すのである。ハロウィンのなかでは、1988年に『ディ・ツァイト』紙に載った「悪魔のハイテク(Des Teufes High-Tech)」³¹からも推測されたように、〈ハイテク(high technology)〉と〈神話離れ(loh mythology)〉が結びついているのではなからうか。ハロウィンは、〈ちいさな〉超越をシンボリックに形を変える芽であろうか。

8. 教会への対立者？

ハロウィンのヨーロッパへの帰還を機に、(接触か対比かはともかく)、宗教的な感情の盛り上がり少なからずみとめられた。

²⁸ Jack Kugelmann, *Masked Culture* (注20.), p.21.

²⁹ Thomas Luckmann, *Bemerkungen zur Gesellschaftstruktur, Bewusstseinsform und Religion in der modernen Gesellschaft*. In: Burkart Lutz (Hrsg.), *Soziologie und gesellschaftliche Entwicklung. Verhandlungen des 22. Deutschen Soziologentages in Dortmund 1984*. Frankfurt a.M. / New York 1985, S.475-487, s.S.483f.

³⁰ 次の新聞記事を参照, Die Zeit vom 28. Oktober 1988.

³¹ 次の新聞記事を参照, Frankfurter Rundschau vom 28. Oktober 2000 (「ハロウィンには誰もが悪魔の到来におののく」 „An Halloween gruseln sich alle auf Teufel komm raus“).

よく知られたできごとを挙げると、2000年10月に南フランスでカトリック教会の側から抗議が起きた。サン・ラファエル (St Raphael) で、ハロウィンに対するメディアを動員した十字軍 (“croisade contre Halloween”) がスタートした。キリスト教会の〈万聖節 (“Toussaint”/“All Saints”)〉に対する〈異教〉的なものとされたのである。かくして万聖節の前夜には、〈戦いの前線のために、ノートル・ダム・ド・ラ・ヴィクトワール教会堂の前での〉集会が企画された。〈骸骨と魔女と幽霊たちの恐ろしい行列、これらの怪物が、本来キリストだけが我々を解放できる恐怖や幻覚を折伏しようとしている³²〉。ハロウィンに対するカトリック教会からの批判の行動は、文字と映像にとどまらず、ときにはシンボリックなアクションの形もとったのである。その点で想起されるのは、1951年、ディジョンでのカトリック教会によるアメリカのサンタクロースの〈処刑〉であった。なおこれは、レヴィ＝ストロースがその宗教史に関する論文「死刑になったサンタクロース」(Le Père Noël Supplicié) において〈昔の宗教と現代の宗教〉の構造的相関、また〈教育的行事への教会人の無理解〉への具体例として取り上げた³³。サンタクロースの処刑というアンチ・アメリカ的なシンボル行動に、レヴィ＝ストロースは、〈ケトル的な〉前史の否定を見るだけでなく、プレゼントを携えて到来する者というキリスト教の歴史までが否定されるのを見とめた。〈サンタクロース、没宗教のシンボル、何というパドックス〉と言う。レヴィ＝ストロースが、輸入されたサンタクロースへの教会側からの処罰の行動に観察したもの、エスノロジーの一大専門知識を以って考察したもの、それはハロウィンにもあてはまるのではなからうか。事実、レヴィ＝ストロースは、第二次世界大戦後のフランスにおいて民間伝承 (tradition populaires) が時間的には迅速に、空間的には広域的に影響をもつようになったとのテーゼの際に、ほんの一言ながらハロウィンをもその事例として挙げている。レヴィ＝ストロースは、〈ル・ペール・ノエル〉すなわち聖ニコラ (St. Nicolas) をカトリック教会の国々のものとして分類するのとは対照的に、ハロウィンを〈アングロサクソンの国々〉の伝統行事とみなした。レヴィ＝ストロースが確めた宗派的な区分は、近年のハロウィンの受容においてもなおみとめられるであろうか。それとも、ユーロ文化は、宗派を超えたものであろうか。

ハロウィン＝プロテスタント説を唱えたのは、アメリカ社会学の指導者の一人、ラルフ・リントンであった³⁴。それによると、ハロウィンは万聖説のポスト宗教改革の形態であり、事実、それはプロテスタント教会圏で催される〈宗教改革の日〉に前倒しされている、と言う。もっとも、レヴィ＝ストロース説をもリントンをも相対化してしまう見解を表明

³² Var-Matin (Nice-Matin) vom 24. Oktober 2000, p.1 und p.3.

³³ Claude Lévi-Strauss, *Le Père Noël Supplicié*. In: Les Temps Modernes 77/1952, p.1572-1590.

³⁴ Ralph Linton, *Halloween through Twenty Centuries* (Adelin Linton と共著). New York 1950.

したのは、匿名ながら、フランフルトの高位の女性神学者であった。その説くところでは、宗教改革の祝い行事そのものが、〈妖怪のどんちゃん騒ぎ〉に冒されており、それゆえハロウィンも胡散臭いものとなっていると言うのであった³⁵。またそこから、教会好みの形態も作られていった。数年前から、教区によっては、削り貫いたカボチャと手作りのコスチュームによる提灯行列が幼稚園に導入されたり、教会関係の若者たちが準備する事例がみとめられる。その点から、ハロウィンをめぐることは、教会が関与した宗教的な反応であると思われることができるであろうか。言い換えれば、宗派的な反応がそこには観察できるであろうか。キリスト教会とハロウィンの関係の基本は、距離であろうか、それとも受容であろうか、依存であろうか、それとも無関心であろうか。

9. 代替宗教としての機能？

先にもふれたように、宗教とハロウィンの関係は、教会側の反撥や宗派的な反応で終るものではない。ハロウィンによって満たされる宗教的な代替機能を問ひ、ルックマンの〈ささやかな〉超越を問うことは、教会という制度（ならびにその文化的逸脱や宗派的特質）との関係を省いても可能である。因みに、ラルフ・リントンは、その小論ながら的を射たハロウィンに関する1950年の文章のなかで、〈魔女やその黒魔術ももはやコミュニティのなかで恐ろしいものではなくなり³⁶〉、〈子供を甘やかし喜ばせることを主たる目的とする一時〉になっていると意味で、ハロウィンを〈頹落したホリデー〉とみなし³⁷。〈前青春期の子供たち〉が行なう行事としての機能を強調したが、近年のハロウィンは、〈大人のお祝い (adult celebration)〉への傾向の故に、宗教的な意味を帯びることへも向っている。〈見えない宗教〉として、仮面の宴やスペクタクルに富んだ多彩な交流を伴いつつ、ハロウィンは世界観や〈信心〉や世俗宗教の方向を見せている。ハロウィンは〈迷信とたわむれる夜〉³⁸なのである。それによって、ハロウィンは、圧迫されたもの、また（あるいは）投影されたものがその遊戯的な仮面を被った表現ならびに権利となる場所である。数年前、カタリーナ・アイシュは、アメリカでの観察に基づいて、この方向での考察をおこなった³⁹。昨年、フランスの新聞には、万聖節に因んで現代社会におけ

35 Frankfurter Rundschau vom 28. Oktober 2000.

36 同上。

37 Ralph Linton, *Halloween* (注33), p. 104.

38 Karen Sue Hybertsen, *Twisting Space* (注2), p. 47.

39 Katharina Eisch, *Eine Reise zu Halloween. Der Tod und die Authentizität der Bilder*. In: Kea. Zeitschrift für Kulturwissenschaften, 9/1996, S. 139–146.

る死霊の追い出しへの回想がなされ、またハロウィンとは遊び行事としてアレンジされた死への公式な想起であるとの見解が表明された⁴⁰。しかし、ハロウィンを死や死者に関係付けて解釈するのは、〈正統的な〉シンボル・エネルギーから発するのではなく、他者や墜落者や被圧迫者との遊びから発しているのであれば、漠然としたものである。「儀式、万歳 (Vive les Rites!)」、これは、11月1日付けの『ル・モンド』紙の見出しで、その記事は、〈この祭りが成功した〉のは〈遊びの形で、死の恐怖や一人ぼっちの孤独を追い払う〉道具となっていることにある、との見解を盛っていた。すなわち、ハロウィンは、現代の〈死者儀礼^{リトルギー}〉であり、〈多少とも宗教色が入り込んだ形で〉高度に濃縮された追憶儀礼であると言う。ハロウィンには〈思い入れ〉がこめられるが、それは、そのときどきの状況や時期によって変化する意味付け行動あるいは〈プロジェクト〉によって現実のものとなる。ハロウィンのシンボリックなエネルギーとしては、どのような事例があるであろうか。

10. 読解の多様性？

ハロウィンを深読みし過ぎただろうか、入れ込み過ぎただろうか。もつとも、ハロウィンには、流行のテーマとなって、延いては何もかも尻拭いしなければならない危険性はないだろうか。しかし、誰がこれをアクチュアルなテーマとして取り組んでいるだろうか。取り組みの主体は、学者(しかも分野を問わず)よりも、むしろハンス＝ゲオルク・ゼフナーの用語を使うなら、現代という〈同時代の相互影響的共同体〉⁴¹であろう。これらが行事の読解の多様性を促しているが、また読解のあり方は、〈相互影響的な儀式〉のなかで自己を客体化する。行事を生活世界の面から組織し意味付けし、そこから集団の習慣がかたちづくられる。そして習慣は、独自の推力を発揮し、また独自の美とシンボルの体系のなかに収まり、さらにその生活世界に独特ものとして生み出されたシステムを、時間的・社会的・精神的な体験組織化をめぐる自己発見と境界踏み超えの集団的かつ個人的形態への継続的・組み込み的な図式にする。伝承された儀礼・シンボル形態が、アクチュアルな行動意図への結合点かつ接続可能性を提供する。アルカイックなものとの混合がハロウィンを儀式的な通行証にする。儀礼の複合としてのハロウィンが果たすところはまことに多い。それは、ハロウィンが多くのを可能にするからであり、また多様多彩なかたちで読解を許すからである。

⁴⁰ Le Monde vom 27. Oktober 2000 und von 1. November 2000.

⁴¹ Hans-Georg Soeffner, *Die Rituale des Antiritualismus. Materialien für Außeralltägliches*. In: Der., *Die Ordnung der Rituale. Die Auslegung des Alltags 2*. Frankfurt a.M. 1992, S. 102–130, s.S. 107.

ハロウィンが存分に提示する古今の相互作用は、この行事を、衝動の儀式にする（カーデヴェー祭り）にすると共に（フランスでのように）学校の通過儀礼（rites de passage）ともする。さらに、教会による位置の目印づけ（教会はハロウィンを元の故郷と新しい故郷の混合物とみなしている）にも、混乱した（つまり下向き < à la descente > の）宗教的心理にも合うのである。一方では、新しいものが、古い < 本来の > ものと名乗りつつ魅力を発揮する。< ここではなお若い、アングロサ・アメリカから輸入された行事 > と、ベルリンの新しい < エリート > のカーデヴェー祭りについて、言われたものである。ハロウィンが、ケルトとの新年祭として（< 古いドルイド教の行事 >）導入された後のことである。そして、そのデパートの祭りでは、< 昔の引き攀ったような逆境への回想も、また今後へ期待も望見も、この気分を損ないはしない。ジルヴェスター（大晦日）の堅苦しいお祝いがトラウマとなっている人も、魔女や悪魔の下で楽しく心置きなく大暴れするだろう >⁴² と言うのであった。しかし他方では、新しいフォーマットを得た古きものが強力な暗示力を発揮している。女性誌『コスモポリタン』が指摘する魔女の姿がそうであり⁴³、ジャック・ターゲルマスがドキュメントを記録したハロウィンのパレードもそうである⁴⁴。他の流行の儀式では余り見られないが、ハロウィンの場合は、古い魔女を取り上げ、それを、マルティーン・シャルフェが「悪霊など追っ払え — 文化の実践としての民俗学の智慧」⁴⁵において描いた意味合いのなかに置くのである。先にもふれたように、ハロウィンの容量は大きい。それは多くのものを受け入れるからである。それは、文化研究かつヨーロッパ・エスノロジーに向けた観察のフィールドにも言えるだろう。なぜなら、それはクロード・レヴィ＝ストロースがその『ル・ペール・ノエル（サンタクロース）』において述べたところを引くなら、< 人類学者が、自分自身の社会のなかに儀礼やカルトそのものが突然生成するのを実見するこうした機会はめったにあるものではない >⁴⁶ からである。ヨーロッパの約15人の同僚にこのアンケートを寄せて、通常の < 宗教生活とは異なった形態の原因を調査し、何がインパクトであったかへの考察 > を依頼するのは、そのためである。

御協力に感謝する。

⁴² Der Tagesspiegel vom 30. Oktober 2000.

⁴³ Cosmopolitan (注10.)

⁴⁴ < 彼らはパレードの守護霊であり、街路に漂う自動車のエネルギーを払い退けるのだった >。参照、Jack Kugelmass, *Masked Culture* (注21.)

⁴⁵ Martin Scharfe, *Böse Geister vertreiben. Vollkundliches Wissen als kulturelle Praxis. Zugleich ein Beitrag zur Brauchforschung*. In: Konrad Köstlin / Herbert Nikitsch (Hrsg.), *Ethnographisches Wissen. Zu einer Kulturtechnik der Moderne*. Wien 1999, S.137-167.

⁴⁶ Claude Lévi-Strauss, *Le Père Noël Supplicié* (注33), p.1575.

アイルランドのハロウィン — 連続性と変容

パトリシア・ライサート, ダブリン

(原タイトル) Patricia Lysaght (Dublin), *Hallowe'en in Ireland: Continuity and Change*.

1. ダブリン郊外の2000年ハロウィン：“Going out” or going “trick or treat” on Hallowe'en

10月31日に夕方だった。宵闇が降りた。外では、花火が静寂を乱している。屋内では、林檎、ナッツ、棒付きキャンデー、棒チョコとビスケットのミックスが、すでにテーブルに載っている。私たちは、子供たちが近づくのを、わくわくしながら待っていた。そのときドアのベルが鳴って、ハロウィンのパーティーに集まる最初のグループが到着を告げた。6歳から10歳位までの3人の子供たちがドアのステップに立っていた。一番年長の子は顔を完全にマスクで被って、男の子か女の子かも分からないほどで、それに店で買える魔女の衣装で身体をすっぽり被っていた。後の二人の子は、顔の半分を黒いマスクで覆い、下半分を出していたが、そこには何色もの絵の具をぬっているのだった。一人はバットマンのコスチューム、もう一人は黒づくめの服装で、そこにあばら骨が現れていた。彼らは、持っていたバッグを高く上げて、“treat”をする用意があることを見せると、一緒に“help the Hallowe'en party”を歌った。3人は順番にご褒美をもらった。そしてコスチュームを誉めてもらおうと、次の家を訪れるために去っていった。

これと同じ子供たちの訪問は一時間余り続き、二人連れや四人一組がやって来た。よその家のドア・ベルを鳴らす音も街路にこだまして聞こえてきた。グループは、小さな子供がまじっているときは男女一緒だったが、やや年長の子供になると、男か女かでまとまっていた。因みに、最も年長は12歳位で、一番幼い子は5歳位だった。もっと幼い子が初めてのハロウィンとして年上の子供たちと一緒にすることもあるが、両親のどちらか（多くは父親）が少し離れて見守っている。幼い子がアクシデントに遭うおそれもある。とりわけ、花火が飛び散る危険である。花火が禁止され、ブラック・マーケットでしか手に入らなくなって以来、むしろ危険は増している。とまれ、一つか二つ花火の音がしないと、同じハロウィンとは思えないだろう。

ハロウィン・パーティー

ヴァラエティに富んだ衣装の子供たちが仮面をつけたり顔に絵具をぬったりして数人のグループで家々を訪ね、時には通行人からもリクエストを受けて“help the Hallowe'en

party”を歌うのは、今も、10月31日のダブリンの親しい光景である。これほど力強い形で首都に生き残っている子供の習俗は他にはあるまい。子供たちは、普通、自分の住んでいる一画の街路で、ハロウィン・パーティーのために寄付を集める。グループの組み合わせやコスチュームのアイデアは数週間前に話し合われる。具体的な変装はグループの一番力を入れるものとして、ハロウィンの直前に決める。どの子供がドアのベルを鳴らすか、誰がどの衣装を着けるかは、子供たちと両親が話し合う。特に母親がすてきな思い付きを口にすることが多い。それだけに、〈アウトサイダー〉、つまり予期せぬ闖入者には、その地区の子供たちも両親も注意を怠らない。ハロウィンには、テリトリーの感覚が、子供にも大人にもはらくのである。

子供たちは一回りすると、家へ帰って戦利品のなかから探し物をしたり、あるいは友達の家へ集まってハロウィン・パーティーの準備をする。そのときどきの菓子類のあつまり具合にもよるが、ナッツなどは捨てられてしまいかねない。それに較べて、棒チョコや菓子や棒付きキャンデーはととも喜ばれる。貰ったものの残りはプールしておいて分配する。あるいは、それぞれが自分が集めた品々を取っておき、他の子供としたたかな駆け引きで交換をすることもある。菓子類は、夜のハロウィン・ゲームの間にたのしむが、戦利品の成果によっては、一日か二日もつこともある。



写真1：ハロウィン・パーティーのために菓子類を集めてまわる。ダブリン州モンクスタウン (Monkstown, county Dublin), 1988年。(Courtesy of the Department of Irish Folklore, University College Dublin, 撮影 Patricia Lysaght)

ハロウィン・ゲーム

変装した子供たちが家々を訪れることは、アイルランドの東部・南東部・北東部の各地で記録されてきた。それに較べて、ハロウィンを騒いだり宴会を開いたり、また占いによって祝うのは、アイルランド全土で今日まで続いている¹。ゲームは、ハロウィンのお祝い

¹ Kevin Danaher, *The Year in Ireland*. Cork and Dublin 1972, p.200-227.; Sean O Suilleabhain, *A Handbook of Irish Folklore*. Dublin 1942, p.343-347. 昔の“Samhain”祭、すなわち我々のハロウィンと重なる前夜祭 (eve) に関係して、4詩節から成る10世紀頃の詩歌が伝わっている。詩歌は4部分に分かれ、“Samhain”を含む四季を祝い、またその祝宴を重要なものとして称揚している。次の文献を参照、Kuno Meyer (ed.), *Hibernica Minora*. Oxford 1894, Appendix. p.48-9 (Anecdota Oxoniensia).

ヨーロッパ諸国のハロウィン

の重要な要素であり続けている。参加するのは子供たちであるが、大人のこともある。大人あるいは子供たちは声をかけながらゲームの行方を見つめる。ゲームは、普通、陽気で騒がしく嬌声が飛び交う。特に、水を使うゲームの場合がそうである。そうしたゲームは結構難しく、かなりの時間、参加者の注意をみつめることになる。最も一般的なのは林檎食いゲーム (snap-apple) で、林檎やコインを水に漬けたり出したりする。林檎食いゲームには、またロープに吊るした林檎を参加者がジャンプして食いつくという形態もある。部屋に張りわたしたロープから振り子のように動いている林檎めがけてジャンプするのである。プレイヤーは両手を背中で縛られており、振り子のように揺れている林檎が顔に当たるだけのことも多く、うまく食いつくのは難しい。

林檎を水に漬ける場合も、プレイヤーは後手に縛られ、膝をついたり、背もたれのついた椅子に坐る状態で、前に持ってこられた皿の上に被いかぶさる。皿のなかには、林檎が浮いており、それを上下の歯ではさんで持ち上げるのである。ところが、水面に顔を近づけて頑張っていると、仲間たちがその頭を押さえて水に漬けたりする。プレイヤーは堪りかねて口から水を噴出し、離してくれと頼むことになる。見物人が一番面白いのも、そうした場面である。また、コインを使ったゲームもある。たいてい銀貨であるが、当然ながら、コインは皿の底に沈んでいる。そこでプレイヤーは、頭を水に突っ込んで、舌と歯でコインを啜えて引き上げる。皿の外までうまく運び出せれば成功である。



写真2：ハロウィンのゲーム、林檎食いゲーム。ダブリン 1992年 (Courtesy of the Department of Irish Folklore, University College Dublin, 撮影 Rionach ui Ogain)



写真3：ハロウィンのゲーム、水に浸かった林檎を取る。ダブリン 1992年 (Courtesy of the Department of Irish Folklore, University College Dublin, 撮影 Rionach ui Ogain)

<目隠しごっこ> (Blind-man's buff) は、今日では、屢、イヴニングの余興の最後に置かれる。目隠しをした一人の大人あるいは子供が、他の者をつかまえるわけだが、誰もが捕まえられまいとして音を立てずに距離をおく。そして捕まった者が、次に目隠しをされ、こうしてゲームは続いて行く。

占い

ハロウィンのゲームは、昔のアイランドではよく行なわれた。その最後に来るのが占いであるが、多くは結婚に因むものであった²。バターを塗った <barm brack>, すなわち酵母菌を入れた軽いフルーツ・パンは、ハロウィンのパーティで最も待望されるものであるが、それは、中に指輪が仕込まれているからである。“barm brack” 自体は、年間を通じて広く用いられるが、それに指輪を入れるのはハロウィンだけで、“Hallowe'en bracks” と呼びならわされている。子供たちが指輪を懸命に探すのは男の子も女の子も同じで、見つけた者は早く結婚することになるとされる。林檎も、占いでよく使われる。林檎の皮を剥くのは主に女の子である。剥いた皮をテーブルに落としてゆき、その形状から、将来の結婚相手のイニシャルを読み取るのである。



写真4：ハロウィンの占い。林檎の皮を剥いて、未来のパートナーのイニシャルを探す、ダブリン 1935年 (Courtesy of the Department of Irish Folklore, University College Dublin, 撮影 Maurice Curtin)

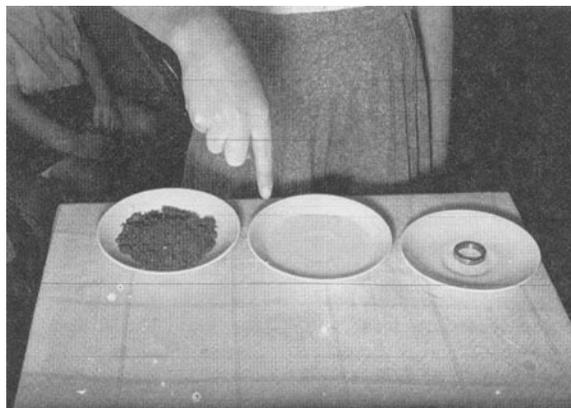


写真5：ハロウィンの占い。土、水、指輪がそれぞれ皿に載っている。ダブリン 1935年 (Courtesy of the Department of Irish Folklore, University College Dublin, 撮影 Maurice Curtin)

² Danaher, op.cit., p.218-228.

その他の占いの種類にも、今日なお大人にも子供にもよく行なわれるものがある。俗信と言っても、半ばおふざけであるが、種々の品物を入れた小皿をテーブル上に並べるといふのがある。小皿には、指輪、水、布切れ、銀貨などが載っている。占いを挑む人は、目隠しをして、手を引かれてテーブルに近づき、その手にした小皿の中身によって、来たる一年の運勢が分かるとされる。指輪は結婚を、コインは富裕を、水は引越しあるいは移民になって出てゆくことを、布切れは貧乏を意味する。昔は土くれも置かれて、死ぬことを指していた。今ではめったに行なわれなくなったが、それに当たった子供たちを怖がらせたり動揺させたりしないためであるとの理由が語られている。

悪ふざけ

ハロウィンには、伝統的に、さまざまな悪ふざけが都市でも田舎でも行なわれてきた。年長の少年たちや青年たちがその主体である³。田舎では、煙突を塞いで住んでいる人を煙攻めにして家から追い出したり、農機具その他を動かして、通常の農作業を妨害する。都会では、どこの誰とも分からないのをよいことにして、近所の家の呼び鈴を鳴らしたり、窓を叩いておいて、一目散に逃げたりする。また家のドアの2つのハンドルを縛って、玄関から出られなくする。そうかと思うと、ドアの外で犬の糞を入れたペーパー・バッグを置いた上で、ドアの階段で火を燃やす。火に驚いて家人が飛び出すと悲惨な結果になるわけである。また生垣の傍で僅かに火を燃やすこともある。しかも火災の危険のために、ドア・ベルを鳴らすのである。ドア・ベルはハロウィンの際にはまことに迷惑な代物であるが、取り外すわけにも行かないのは、それが無ければハロウィンのトリックスターが悪ふざけをしたのに気づかない怖れがあるからである。

篝火 (Bonfires)

アイルランドの東部・南東部・北東部の一部では、ハロウィンの慣わしとして篝火が残っている。ジャック・サンティーノは、この風習が北アイルランドで特に強く、そこには種々の意味がこもっていることを見出した。篝火自体は、ハロウィンだけでなく、他の期日や機縁によっても催されるが、北アイルランドでは、それは政治的・文化的・社会的な脈絡を伴っている⁴。ダブリン市内や周辺地域でも、ハロウィンの篝火は根強い慣わしであるが、政治的な意味合いはなく、逆に文化的・社会的な性格が強い。そこでは、ハロウィンの前になると、草地、あるいは他の空き地に、木切れ、タイヤ、その他の燃え

³ Danaber, op.cit., 214-217. また次も参照, O. Suilleabhain, op.cit.

⁴ Jack Santino, *The Hallowed Eve. Dimensions of Culture in a Calender Festival in Northern Ireland*. Lexington, Kentucky 1998.

る材料を積み上げて、ハロウィンの篝火の準備をする。それは、普通、近隣の男の子たちの仕事である。夜の帳が降りると篝火は点火され、近くの大人も子供も集まってくる。大人たちのなかには、子供を車に乗せてドライブをし、付近でも篝火を囲んで騒いでいるのを、遠目に見て廻る者もいる。テリトリーの感覚は、ハロウィンの篝火に付きものでもある。〈よそ者〉が、篝火を囲む賑やかな集いに加わることはめったにない。通常、参加者は近所どうしだけで、老人も若者も一緒である。そして歌をうたい、語り物に興じ、焚き火を喜び、ロースト・ソーセージや何か一寸したものを食べながら楽しむのである。もちろん、篝火の傍での集いが手におえなくなることも無いではない。時には、乱暴な騒ぎになり、火をコントロールできなくなることもある。最近も、その火がもとでぼやが起きて、警察や、また特に消防団が出動したことがあった⁵。

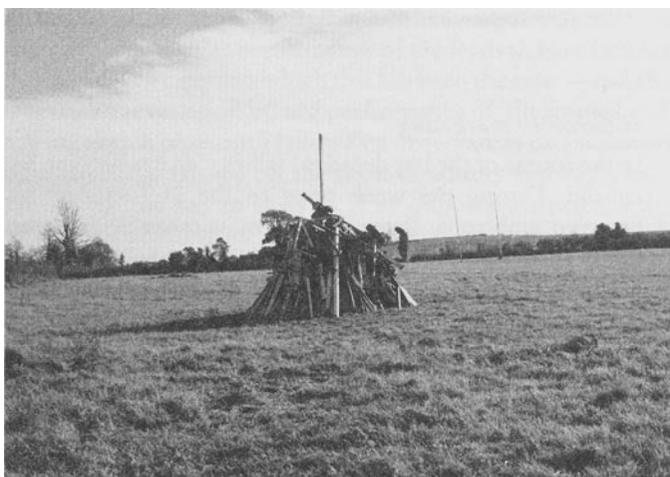


写真6：ハロウィンの篝火のための薪の山。キルデア州モナスタヴァン (Monasterevin, county Kildare) 1994年 (Courtesy of the Department of Irish Folklore, University College Dublin, 撮影 Patricia Lysaght)

ハロウィンのマーケティング

この数十年を通じて、ハロウィンは著しくコマーシャル化された。10月31日の前の一週間、フード・ストアにはハロウィンの関連品が並ぶ。箒の柄に跨る魔女の紙人形、骸骨、

⁵ 昔の“Samhain”祭と結びついた乱痴気騒ぎについては次を参照, Mesca Ulad, [“The Intoxicaion of the Ulstermen”], *a story set at “Samhain”*, edited by W.M. Hennesy (Royal Irish Academy, Todd Lecture Series Vol.I. Dublin / London 1889); また現代ハロウィンの際の乱痴気騒ぎについては次の文献で扱われている。参照, Kevin Danaher, op.cit., p.200-217.

種々の化け物、それに林檎、カボチャ、ココナッツ、これらが天井から吊り下げられる。またトレイに盛った林檎、種々のナッツ類、数個のカボチャなどが主なディスプレイである。今日では、特に都会では、カボチャ・パイを作るためでもないのに、カボチャを買いもとめる人々も少なくない。その訳は、カボチャの外枠で、そこにグロテスクな顔を刻み、中には蠟燭を立てる。それには、伝統的なカブラ (turnip) よりも、カボチャの方が中身をえぐり出すのが簡単なのである。アメリカのメディアの影響にも拘わらず、カボチャ・パイは、アイルランドではハロウィンの祭りでは一般的にはなっていない。それに較べて、キャンディの取り合わせ、棒チョコ、ビスケット、その他の菓子が、やって来る子供たちへの贈り物に適しており、商店はその飾りつけに励んでいる。フルーツ・パン (barm bracks) も登場するが、法的な苦情に配慮して、中にはいつている指輪で歯を傷めることへの注意書きが付いている。パン屋は屢ウィンドウでのディスプレイに工夫を凝らし、他の商店も仮面とコスチュームを飾り付けている。

こうしたコマースリズムが、却って、祭りの認識を高めたように思われる。事実、コマースリズムは、アイルランドの多くの地域で、伝統的なハロウィンが持っていた地方性や町内的な性格や家庭の祭りなど様々な側面を立て直したところがある。そうして立ち直った要素には、ハロウィンの食べ物 (夕食のためのキャベツ入りのマッシュド・ポテなど) や、特殊なゲーム、占い、悪ふざけ、さらにアイルランド東部では変装した子供たちによる家々の訪問やかかり火の周りでの集いなどである。

ここで描いた輪郭から見て、ハロウィンは今日では本質的に子供の祭りとして祝われ、そこに大人が部分的に参加するのである。アイルランドの多くの場所でこうした状況が見られることは、印刷された文献だけでなく、20世紀に集められた多くの聴き取り調査⁶からも明白である。それと共に、18世紀には大人が中心であり、19世紀にもそれがなお認められたものだが⁷、今日のような子供の伝承に変化したこと、またそれが20世紀を通じて起きた変化であることも明らかになる。さらに、必然の結果として、季節的な変化や推移の感覚とか、超自然的な世界や死霊との接続、さらにそこに一体となっていた世俗の祭りのあり方が、時間の経過と共に失われたことも、これまた見紛いようがない。それがどの程度であったかは、次に挙げるイニッシュモア (Inishmore) あるいはアラン (Arain) での祭りの最近の様子についてのスケッチからも知られよう。西アイルランドのガルウェイ州 (Galway) の海岸の沖に浮かぶアラン諸島の最大の島である。これはハロウィンの近年

⁶ Irish Folklore Commission によって1943年に行なわれた “Samhain / Halloween” に関するアンケートへの回答は注目すべきものである。

⁷ Danaher, op.cit.

の実態について、最近のフィールドワークに基づいた貴重な報告のレジュメと分析である。調査したのは、アラン島に住むパラドレイジン・クランシーという女性で1993年に発表された⁸。その報告から明らかのように、ハロウィンは本質的に大人の夕べであり、祭りが季節性を帯びた〈異境〉の性格にあることが判明する。事実、島は静寂につつまれ、それが醸し出す不気味で恐ろしい雰囲気におおわれるのである。

II. ゴールウェイ州アラン島における1990年のハロウィンの観察から

イニッシュモア(“Inismor”, 英語では“Inishmore”で〈大きな島〉の意)は、文化的にも地勢的にも特異な場所である。西アイルランド、ゴールウェイ州の海岸の沖に浮かぶアラン諸島の最大の島である。島の住民は約800人、最も長いところで9マイルで、島の主な産業は漁業と観光である。定期船が荒い海を突っ切って島と本土を行き来して、観光客を運ぶと共に島の住民の足ともなっている。この他、臨時の滑走路があつて、島と本土を結んでいる。

一年は、二つの大きな季節に分かれている。冬と夏である。どちらの季節も長い、今日では、これは観光産業が関係しているところがある。夏は、いわゆる秋(autumn)まで延びて、11月1日の“Samhain”で終る。またそれが冬の始まりでもある⁹。これで夏の観光シーズンが終わり、離れて暮らす家族を訪れるのも一段落する。天候は悪化し、海は荒れ、小船での漁もされなくなる。定期船や臨時の飛行機便も頻繁ではなくなり、日は短く暗くなる。しかしそのなかで、島の女性たちは、早くも翌年の観光シーズンを見越して編物を始める。

もちろん、島の住民は、島が相対的に孤立する冬場に向けて準備してきた。ジャガイモはすでに収穫を終えており、保存食や食肉も蓄えられている。草葺の屋根は、冬の強風に

⁸ Clancy, Seachain a' Taibhse. *A Study on the custom of Hallowe'en Guisers on Aran (Arain)*, Co. Galway. In: Sinsear, 7/1993, p.29-38.

⁹ ゲーリック語の詩“Tocmarc Emire”(The Wooing of Emer)の12世紀のヴァージョンでは、一年を2季節に分割していることと関連した内容となっている。参照、Kuno Meyer, (ed.), *Tochmarc Emire la Coinculaind*. In: *Zeitschrift für Celtische Philologie*, 3 (1901), p.229-263. なおこの論考では(特にp.245-6. Mitteilung aus Irischen Handschriften IV), さらに補助的な区分として3月期間の4つの短い季節が挙げられる。また早い時期のアイルランドのテキストには、年間を4区分することも明白である。例えば、8世紀の«Brehon Law tract Crith Gabhlach»には«do ceithribh raihuib na bliadhna»とあり、一年4区分が言及される。参照、Ancient Law of Ireland IV. Dublin 1879. 348.21 (アイルランド語の原文), 349.31 (英語訳)。近代アイルランド語では、4季節の表現は次の通り。spring (earrach), summer (samhradh), autumn (fomhjar), winter (geimhreadh)。

耐えるように手入れが済んでいる。こうして島のコミュニティは、長く暗く風の吹きすさぶ冬の数ヶ月を前に、それに耐えるべく、物理的にも、経済的にも、社会的にも、心理的にも、島の原点に戻って行く。

“Oiche Shamhne”，すなわち“The Eve of Samhain”（サムヘインの前夜、つまり10月31日）¹⁰は、そうした元に戻る過程での頂点であり、そのとき、見たところすべての島民が、祭りの担い手として、あるいは祭りの見物人として、手の込んだハロウィンの伝統に結集する。島の若者たちと高齢者たちの三分の一が、男女を問わず仮装で現れる。手袋まで用意するほど入念な仮装であり、しかもその日の夕べを通して誰であるかをさとられないために、身ごなしまで変えている。誰もが一言も口をきかないのは、互いが顔見知りの島の社会では、声で素性が分かってしまうからである。その出で立ちは、島民自身の言い方では、“taibhsi”（死霊“ghosts”）とか“pucai”（妖精“pookas”，“hobgoblins”）であり、不気味で異風であることが大事であるとされている。

その現れ方は次のようである。変装した島人たちは、家々を訪れる者として、闇の中から姿をあらわす。彼らは島中を廻って、てんでに家々を訪ねる。なかでも新築の家は人気がある。ほとんどの家は、この日の夕べには一回か二回の訪問を受ける。伝統的な祝い食の品々である林檎、ナッツ、フルーツ・パンが既にテーブルに用意されている。ドアはロックをせずに、時には招かざる変装者でも受け入れることをあらわすために、やや開いていることすらある。〈訪問者〉は、踏み込まれた家人たちに無言の会釈をする。〈お辞儀やジェスチャー〉のこともあれば、素っ気無く〈睨む〉だけのこともある。家人たちは、少し距離をおいて立っているが、それには訪問者が誰であるかを見極めようとの意図もある。そして訪問者の好きなように、台所まで立ち入らせる。実際、訪問者は、何もかも見てやろうとして、寝室まで調べることもある。また、家を立ち去るときには、祝い食を幾らか持ってゆく。こうした訪問は、日没後の数時間の間に数回続く。

家々の訪問がすっかり終ると、変装者たちは、自分たちが行きつけのパブリック・ハウスへやって来る。そこで腰をかけたたり、立ったままであったり区々ながら、また一人であったり、ペアであったりの違いもあるが、ストローで飲み物をとる。しかし誰も口をきかない。カウンターに就いているのが誰なのか、変装者にも互いに分からないのである。

¹⁰ Proinsias MacCana, *Celtic Mythology*. London / New York 1970; Alwyn Rees and Brindley Rees, *Celtic Heritage*. London 1961, Chapter XII (Deaths.); Kuno Meyer (ed.), *The Death Tales of the Ulster Heroes*. Dublin / London. Royal Irish Academy. Dublin 1906 (Royal Irish Academy Todd Lecture Series Vol. XIV.); Patricia Lysaght, *Samhain*. In: Carl Lindahl / John MacNamara / John Lindow (ed.), *Medieval Folklore. An Encyclopedia of Mythos, Legends, Tales, Beliefs, and Customs*. Santa Barbara, California 2000, p.860-862.

真夜中も過ぎる頃、誰も彼もが、ダンス・ホールへ繰り出す。変装者たちは未だマスクをはずしてはず、先に彼らの訪問を受けた島人は彼らともう一度顔を合わせることになる。しかし、変装しているダンスの相手が誰であるかは、相変わらず分からない。男なのか女なのか、既婚者か独身者か、レスビアンかそれともゲイか。しかし誰もダンスの相手になるのを拒まない。それだけに、化粧室は混乱する。素顔のままの島人あるいは他所者は、変装したまま無言で通している男か女がいないことを確かめて、おそろおそろ用を足すのである。

ダンスの時間がファイナルに近づくと、注意は変装者たちに集中する。彼らは、集まりの仲間であることを公式に認められる。そして“Damhsa na Taibhse”，すなわち〈ゴーストのダンス〉が催されるが、変装者だけの踊りで、それによって変装のコスチュームの上位3種類が選ばれる。また、これを以って、ダンスのイベントは終わりになる。ステージに上がるので、島人は変装者が誰であったかを知ることができそうであるが、そうはならないのが慣わしである。さまざまな工夫がこらされていて、実際には、どこの誰かは分からず仕舞である。

以上の短いレジュメと分析から、アラン島のハロウィンが本質においてアンビヴァレントであることが判明しよう。祭りは、時間的な境界を示している。ハロウィンはサムヘイン (Samhain) と重なっている。後者は、ケトルの大きな祭礼で、夏の終わりにして北方の収穫期の締めくくりに当たる。それは同時に、冬の始まりであり、新年でもある。この〈サムヘイン〉は、アイルランドの神話と口承文芸^{フォークロア}を主に表している。言い換えれば、それは、この世と次の世の仕切りがはずれた瞬間である。また死者が彷徨する一時である。生きるものとあの世のものとの出会いが起きる時でもある。アラン島の文脈では、サムヘイン＝ハロウィン・イヴのそうした故習を体現しているのは、イベントを貫く諸要素、すなわち変装や、彼らの振舞い、そして沈黙である。変装者たちに付けられた名称、“taibhse” (ghost) や “puca” (pooka, hobgoblin) は、変装者の出現の様子、言葉の不在、これらは（少なくとも初めてそれらに出会うなら）アイルランドにおける死者の特徴であることが分かるが、これらは、境界が崩れることを映している。この世界と〈異界〉との境界、人間と超自然な存在との境界、死者と生者の境界、屋内と戸外の境界、男と女の境界である。実際、祭りは、時間経過の境目においてコミュニティの目を自らのドラマティックで凝縮したファッションをまとう自分自身に向けさせ、ひとときとは言え充実した瞬間を体験させることによって、これらの対立や二分法をカプセルに入れるか溶解させると言ってもよいだろう。それは、信仰や姿勢が試される緊張と怖れの瞬間でもある。しかしまた、コミュニティ全体を体現する存在である変装者のシンボリックな訪れによって、島民の一体性が再確認されるひとときでもある。したがって、新しい家庭を構えたばかり

の人々の場合などは、変装者の訪れを受けるのは、島の生活へと組み込まれる契機でもある。また、人々が再び接近するチャンスでもある。例えばダンスの催しに端的に見られるように、長く暗い冬の月々を通して人々は互いに信頼し社会的な結びつきを持たなければならないが、それを可能ならしめるのである。このようにして、祭りのエネルギーとシンボリズムは、この地理的に辺地に位置するコミュニティに、夏から冬へと移行することを可能にすると考えられよう。正に“from exo-to-into”へという凝縮によってであり、すべての情動を以ってする課題なのである。

まとめ

アイルランド全土において、今もハロウィンは、活動と遊びと占いを結集して祝われる。地域によっては、悪ふぎけの風習が残り、また東部と北部では、ファイアが続いている。アイルランドのほとんどの地域では子供の祭りであるが、それにも拘わらず、大人が混じってアイデアを出したり、故習に沿ったパフォーマンスを促すこともある。

アラン島の場合は、今日も、明らかに古い時代を体現する思念とパフォーマンスが慣わしとなっている。経済的に豊かになりコミュニケーションが発達があったと言っても、季節の交替が島を揺るがすことは変わらない。夏が終わり、容赦無く冬が来る。ツーリスト、友人、親戚、安全、本土との行き来、島はそれらから切り離される。温かい気候への行程ではあろうが、その前に、長く暗い嵐の日々が続く。島人たちは、夏が再びやって来るまで、自分たちだけでやってゆかねばならない。この点に、伝統と行動のよって来る所以がある。祭りは、ある程度ではあれ、避難所でありハイライトなのである。

フランス流ハロウィン

マルティーン・セガレーヌ (パリ)

(原タイトル) Martine Segalen (Paris), *Halloween à la française*.

年季の入ったエスノロークがいなければ、ハロウィンという現象は、最近になって突如として爆発的に広まったとみなされることであろう¹。フランスでは従来知られていなかった祭りだが、他方で、1977年まで至るところで祝われていた事実もある。と言っても、それはアメリカからやって来た人々が集うパブを中心にした狭い範囲に過ぎなかった。ところが、今やフォークロアの一部となっている。それは、どのようにして可能になったのであろうか。また、どんな意味を伴っているのであろうか。

フランス人でも、世俗化の傾向に熱中し、それゆえカトリック教会の儀式をもはや知らない人々は、ハロウィンが10月31日に催されるのは偶然と思っているに違いない。要するに、<Halloween>, <All Hallow's Eve>, <hallow (heilig)> の <前夜> であり、11月1日の万聖節、11月2日の万霊節を前にした日取りである。また、スコットランドやアイルランドの祭り(新聞各紙は3年前からこれを盛んに書いている)がキリスト教の暦に沿って行なわれる(あるいは別の言い方がされているかも知れない)と言われたりもする。死者の魂が帰って来るのを祝うこの祭りは、ケトルのカレンダーでは一年の始まりであった。そこでは、ランタンに灯をともして悪霊を追い払った。アイルランドの伝説によれば、ジャック・オランタン (Jack O'Lantern) という悪魔と契約を結んだ男が、灯をともしたランタンを持って白いカブラのなかを永遠にさまよう罰を科せられたと言う。

祭りをアメリカへ持ち伝えたのは、アイルランド人移民であった。そこで白いカブラはカボチャに替えられた。カボチャは、充実と豊満のシンボルとされているのである。大西洋の彼方で、この祭りは、近隣的なコミュニティの祭りとなった。とりわけ典型的なアメリカの市区に住む子供たちの祭りで、近所の家々を訪れ”trick or treat”のモットーの下に、こんな唱えごとを言い立てる。<飴玉お呉れ、さもなきややつつけるぞ>。これを

¹ ここで是非言っておかねばならないのは、本稿は具体的な調査に基づいたものではなく、フランスにおいて看過し得ないものであるこの現象について一般的に考察を加えたに過ぎないことである。望むべくは、仮装衣装メーカーや、この祭りをPRのチャンスとしている企業やビジネス、学校などの機関、またとりわけこの行事の消費者にして演者である子供たちのあいだで、系統的な調査を行なうべきである。言い換えると、大都市や中規模都市、また郊外の住宅地域でのしっかりしたフィールドワークが計画される必要がある。

以って、子供たちは死者を体現しており、飴や菓子で慰められると見ることもできないではない。因みに、フランスの田舎では、洗礼のときの飴玉 (Dragée) は、そうした意味を持っていた。洗礼の儀式の締めくくりに、早世した悲運な子供の死者の魂をあらわすものとして集められた子供たちに向けて、飴玉が撒かれたのである。アメリカ合衆国では、ハロウィンは、この数年のあいだに、儀式のインフレーションの様相を見せてきた。街の飾りつけが〈ハロウィン化〉されるだけでなく、一戸建て住宅には、大きな作り物の蜘蛛の巣や魔女や骸骨が取り付けられたり、前庭に俄かづくりの墓石が据えられたりする。都市の郊外によっては、誰もが自分を家を華やかに飾り付けるのを競う傾向すら見られ、造花や簡易のデコレーションの生産者にはこの上ない商売のチャンスとなっている。したがって、コミュニティー感覚と共にローカル・パトリオティズムにも関わるが、この二つの感情は、フランスとは違いアメリカで特に発達を見た。例えば、新来者は、アメリカ文化に溶け込むことと、自分たちのエスニックな帰属性の両方を表現できることになる。たとえば、住宅の前に、アメリカの国旗とプエルト・リコの国旗が並べて立てられる。

死のテーマは、ハロウィンの中心でもある。魔女や悪霊が至るところに出没し、割り貫いたカボチャのなかに灯した蠟燭によって闇の国がほのかに浮かび上がる。子供たちは魔女に扮し、この世のものならぬ装いを凝らす。灯火を手にした子供たちの役目は、生きている者の世界から魔女を遠ざけることにある。そうした扮装は、カーニバルと酷似している。

フランスの場合、この祭りが最初に催されたのがいつであったかははっきりしている。1997年11月に、マーケティング戦略に使われたのである。フランス・テレコムは、オーラ (Ola) という商品名で、新しい携帯電話を発売した。そしてハロウィンを発売日として、その宣伝の中心に、〈オーラウィン〉 (Olaween) なるものを設定したのである。エッフェル塔が聳えるトロカデロ広場には、8500個のカボチャが並べられた。デパートもそれに即座に反応し、専ら関連商品を売り出し、パーティ・イヴェント用品店の趣を呈した。1998年から1999年にかけては、仮面メーカーのセザール社 (César) が加わった他、マクドナルドも応援に乗り出し、その機会を活かして子供たちの想像力を掻き立てるような盛り付けのハンバーガーを販売した (ウォルト・ディズニー社のモチーフが多かった)。かくして、2000年はパーフェクトな成功を取めた。実際、ハロウィンからの逃避など、誰ができただろう。

これらすべての背景にあったのはビジネスである。それは大きな宣伝媒体であった。多くの商店、それもこの祭りとは関係のないものまでショーウィンドーに飾り付けをほどこした。例えば美容院、精肉店、薬局である。まして、デパートや、関連の特定商品の専門店がオレンジと黒で統一されたのは言うまでもない。〈聖ポティロン (Saint Potiron)〉、すなわち〈カボチャ聖人〉が公共の場に姿を現した。カボチャの生産者は、従来ほとん

ど売れなかったこの作物をこの数年大量に扱うようになった。祭りは、学校をはじめ、子供の世界に広がった。クリッペⁱをはじめ幼稚園や子供図書館に至る小さな子供向けの施設や作り物は、常にアクチュアルなテーマを探しているところがあるが、それらはハロウィンに活動の場を見つけた。〈les goûters〉、つまり子供のための午後のおやつは、決まったセレモニーとして目下非常な広がりを見せているが²、やはりハロウィンのテーマを取り入れている。魔女や悪魔に扮した子供たちがグループになって、10月31日の午後、蜘蛛の巣の作り物をあしらった近所の家々を訪れる。郊外によく整備された住宅地域では、USAの〈trick or treat〉の行事がそっくり模倣されているところがあるように思われる。例えば、ブルターニュ半島のランヌ (Rennes) 地方である。それに対して、フランス東部は昔からニコラⁱⁱが祝われてきた地方で、ハロウィンの侵入にはほとんど反応を見せていない。こうした実態は、従来、研究の空白であったが、今後の調査が期待される。

ところでは、ハロウィンは新しい儀礼であろうか。ここは儀礼 (Ritual)³を定義する場所ではないが、ハロウィンの幾つかの側面、特に様式的な性格に着目し、観察するのは無駄ではなかろう。マーケットの観点からの企画や思い付きが強くはたらいっているのは事実であるが、同時に、ハロウィンが世俗の行事であることも否定できない。かかる実態を注目するなら、種々の根拠から、クロード・レヴィ=ストロースの有名な「処刑されたサンタクロース」⁴との並行関係が見えてくる。レヴィ=ストロースは、1952年に、新聞の批判的な論調にコメントを加えて、こう述べた。〈教区民の子供たちが見守るなか、ディジョン大聖堂の中庭で、サンタクロースは火炙りにされた〉。聖職者たちの非難は、祭礼のキリスト教的な意味が、反宗教的なⁱⁱⁱ神話との結びつきによって損なわれていることにあった。クリスマスが異教の祭りとなってゆくことに、聖職者たちは憂慮に堪えなかった。そこで、ハロウィンについても、新たな儀礼が芽生えつつあるのかどうか、との問いを立てることができよう。教会は、儀礼と関係したシンボルの貯蔵庫でもあるが、現実の動き対していかなる位置を占めるのであろうか。宗教的なものの外部に霊的なものを指摘することは可能であろうか。かくしてレヴィ=ストロースは、次のように言及した。〈エスノグラフが、元からの社会のなかに、儀礼や信奉が突然生まれるのを観察する機会はそうあ

² Régine Sirota, *Les copains d'qbord. Les qnniversqires de l'enfance ; donner er reevoir*. In : Ethnologie frncaise 1998 ; 4 ; p 457) 471 : dies ; *Les civilités de l'enfance contemporaine : L'anniversaire ou le déchiffrege d'une configuriton* : In Education et sociétés 1999, 3, 1, p. 31-53.

³ これについては次の拙論を参照, Martine Segalen, *Rites et rituels contemporains*. Paris, Nathan, 1998.

⁴ Claude Lévi-Strauss; *Le Père Noël supplicié*. In: Les Temps modernes 77/1952, p. 1572-1590.

るものではない>⁵。これと同じ意味で、ハロウィンは新来者として浸透したと言うこともできる。レヴィ＝ストロースはまたクリスマス儀礼の成功についても分析を加えた。ディジョン大聖堂の聖職者たちは、フランスに駐留するアメリカ軍の存在に帰因すると説いたが、原因はそれだけではなかった。そうした刷新は、伝承的な儀礼の基盤にも立っていた。レヴィ＝ストロースは、クリスマスが13世紀まで祝われながら、19世紀半ばまでは忘れられていたことを指摘した。私たちの文化のなかには、クリスマスを通じて具体的になった標識が幾つもある。夜中に燃える薪、建物にほどこすデコレーション、暗がりや夜に灯りが果たす役割。レヴィ＝ストロースはまた、子供たちへのプレゼントの役割をも力説した。すなわち、子供たちは、伝統社会では死者の魂を体現するものとされ、それを慰めるためだったのである。<それゆえ非常に古い要素が掘り起こされると共に、そうではない要素も導入され、結果的には、この新機軸の儀礼は、遙か昔の行事を改めて永劫のものとし、改変し、再度生気を付与することになった>⁶。かくして、クリスマスは宗教的なセレモニーの外部でも神聖な性格を持つのである。

ハロウィンについても、忘れ去られた後に再び生きを吹き返しつつあるような脈絡が見出せるであろうか。ハロウィンが儀礼の形成に向かいつつあると見なせるかどうかは怪しいものの、霊と結び付けられた子供たちの存在が重みを持つことは、(公的にそれが意識されているのではないにせよ)その方向を示してはいよう。もっとも、それが如何なる結晶を作ることになり、どのシンボルが意味をもつようになるかを予測するのは、なお時期尚早である。

さらに注目すべきこととして、数年前から、何かききな臭いものを感じられる。先にサンタクロースが、少なくともカトリック教会の目には、神聖な儀礼の世俗版と見えたことに触れたが、それと同じく、ハロウィンも悪魔と結び付けられている。2000年には、ハロウィンの氾濫に対して数人の聖職者が激怒した。因みに、同様の動きとしては、1950年代に、イリュミネーションをほどこしたクリスマス・ツリーを家庭にも公共の場にも立てることが一種のブームとなったとき、その現象に教会は狼狽したものである。ともあれ、問題の聖職者たちには、ハロウィンは(屢言されるような)取るに足りない世相ではすまなかった。『リベラシオン』紙に、2000年10月31日付で「祭壇、カボチャ征伐を訴える」という記事が載った。<今年、教会は、またもやハロウィンへの十字軍に着手した。もっとも、ハロウィンは、ビジネスが主体であり、そう危険なものではないと思えるのだが…>。この怒りの原因は何だったのだろうか。この異教の祭りは、カトリック教会の万聖節(11月1

⁵ Claude Lévi-Strauss; *Le Père Noël supplicé*. (注4) p.1575.

⁶ 同上, p.1579.

日)と重なり、また万霊節(11月2日)の前夜でもある。この日取りの一致に、救い難いほどの競合関係を見て、精神界をめぐる境界領域の紛糾をみとめる向きもある。闘いの先頭に立つのは、クレルモン＝フェランのイポリット・シモン司教(Hyppolite Simon)であった。司教会議の副座長であり、『異教フランスへの途上にあつて』(Vers une France païenne)の著者でもある。なおこの本は、最近ローマで開催された宗務会議でも議論の材料になった。〈政教分離^{iv}、すなわち教会と国家の分離の観点から言えば、教師が学校のクラスの生徒を教会堂へ連れて行って、教会祭礼としての《万聖節》を解説することは難しい。しかし、多くの学校がハロウィンの催しを始めている。〉カトリック教会がこのように怒りを見せたのには、2つの理由がある。一つは、異教の祭りが宗教的な祭礼を妨害しているからである。二番目は、その異教の祭りが、本来世俗の施設であるべき学校の支持を得ているからである。

新聞記事が元になって、聖職者の一部は、彼らがサタンへの祈禱とみなしてきた種類の祭儀への怒りを改めて表明した。プロテスタント教会の一宗派が設けているウェブ・サイトには、次のようなコメントが載った。〈ハロウィンに混じっているオカルト的・サタン信奉的な要素は無害どころではない。この祭りは、冷静な見方からすれば、おふぎけであり無邪気なお祭りということになるが、事實は、魔女信奉と破滅的な交霊術への入り口に他ならない。〉キリスト教会は、長い間、世界に対して繰り返し魔法をかけるに必要な儀礼の唯一の提供者であったが、今日ではその面での独占は崩れ、特別の力を持っていない。それは、たとえば、国民的な行事としてのマラソンや、労働組合のデモや、企業が主宰する祭りを見れば明らかであろう。

最後に、1950年代のクリスマスと、2000年のハロウィンの並行を挙げることができよう。どちらの場合も、現代社会における霊性(das Sakrale)の問題が前面に立っている。儀式(das Ritual)の定義には、宗教性の定義と聖性の定義が切り離せないことは、デュルケームやユベールやモースの基本的な論考が教えるところである。^v彼らが分析を行なった社会では、なお宗教と聖性の二つの領域が絡み合い、一体のものと見ることができた。この世界は世俗化が進み、教会は(それに文化人類学者も)制度的な確立された宗教の外にも霊性(Sakarales)が存在する事実と折り合うことに困難を覚えている。異教的なクリスマスも、キリスト教のクリスマスと同じように霊性を伴っている。ハロウィンもまたそれを示している。すなわち、ハロウィンが子供たちに呼び起こす感激がそうであり、またハロウィンが(好むと好まざるとに拘わらず)死やあの世との関係を指し示すことから、その事情が知られよう。

ハロウィンが私たちのあいだで続くことは間違いあるまい。その点では、マーケティング調査の専門家の言うところに従ってもよいだろう。彼らは、子供たちに狙いをさだめた

のである。さらに、マーケットを離れたところでも発見がある。ハロウィンが成功しているのは、私たちの社会に儀式への強い希求がはたいているからである。儀式、すなわち社会に求心的にはたらき、デュルケームの言い方を借りれば「集団的な心霊を思い起こさせる」ところのものである。ハロウィンは子供をターゲットにしたことによって、揺ぎ無い成功を取めた。子供が、怖いものを見たいという欲求を深層心理において抱いているからである。その証左として、この数年に見られたハリー・ポッターの圧倒的な成功を挙げてよい。20世紀の後半、社会は、死のテーマを駆逐することに力を注いできた。そして今、子供たちは、尖がり帽子と歯の生え揃わない微笑の奥で、私たちのヨーロッパが老いてしまったこと、それは必然的に死が社会にとって重要なテーマとなったことを教えてくれるのである。

(原文への付記) フランス語からドイツ語への翻訳担当：ナターリエ・ペヨー (Nathalie Peillex)

【訳注】

- i p.194 クリッペ (la Crèche, クレーシュ)：イエス・キリストの誕生の場面を表した組人形で、カトリック教会では古くからクリスマスに飾られてきた。
- ii p.194 ニコル (Nicole)：聖者ニコラウス (Nikolaus) のフランス語表記。サンタクロースの淵源で、カレンダー上は12月6日が例祭日。但し、フランスでもドイツでも、その行事は教会性から遠ざかっていることが多く、粗皮、藁の衣、襤褸をまとった変装者が暴れ歩く (それはそれでルールがあるが) 一見乱雑な習俗となっていることが多い。また教会的な聖人の扮装者が家々を訪れるところもあるが、それを以って、より古い形態とも断定できない。18世紀以後に民俗への誘導の運動があった結果であることも珍しくないからである。
- iii p.194 反宗教的 (a-religioser Mythos)：宗教的 (religious) は多くの場合、キリスト教を指す。以下の文脈もそうである。
- iv p.196 政教分離 (laïcité)：この用語では、学校教育について言われることが多い。
- v p.196 デュルケーム、ユベール、モース：いずれもフランスの文化人類や宗教社会学において著名な学者。エミール・デュルケーム (Émile Durkheim 1858-1917) はフランス社会学の創始者とされ、1897年に『社会学年報』(L'année sociologique.) を創刊して独自の学派を形成した。オーストラリア東部の原住民のトーテミズムの研究 (Les Formes élémentaires de la vie religieuse : le système totémique en Australie. 1912) や、同時代の西洋社会へのアノミー (annomie) の概念による解明、また『自殺論』(Le Suicide. 1897) で知られる。；アンリ・ユベール (Henri Hubert 1872-1927) はフランスの宗教社会学者。主要著作には、モースとの共著『宗教史論集』(Mélange d'histoire des religions. 1909) の他、『ラ・テーヌ期までのケルト人とケルト語発展』(Les celtes et l'expansion celtique jusqu'à l'époque de la Tène. 1932) がある。；マルセル・モース (Marcel Mauss 1872-1950) は宗教社会学者・社会人類学者で、特に『贈与論』(Essai sur le don. 初版1898) で知られる。